

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ				重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ				適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
抗白癬菌成分	エキサラミド 医療用医薬品としてなし																
塩酸アモロルフィン	ベキロンクリーム	抗真菌作用 塩酸アモロルフィンは皮膚糸状菌(Trichophyton属、Microsporum属、Epidermophyton属)、酵母類(Candida属)、黒色真菌(Fonsecaea compactum等)及び黴風菌(Malassezia furfur)に強い抗真菌作用を有した。作用機序 塩酸アモロルフィンの作用機序は、エルゴステロール合成経路上の2つの段階を選択的に阻害することにより、細胞膜の構造、機能を障害し抗真菌活性が発現される。				0.1~5%未満 (局所の刺激感、接触皮膚炎、発赤、そう痒、紅斑) 0.1%未満 (皰爛、疼痛)		本剤成分過敏症の既往歴	妊婦又は妊婦の可能性のある婦人				投与部位 眼科用として角膜、結膜には使用しない。		1日1回患部に塗布する。	下記の皮膚真菌症の治療 ・白癬:足白癬、手白癬、体部白癬、股部白癬 ・皮膚カンジダ症:指間びらん症、間擦疹(乳児寄生菌性紅斑を含む)、爪囲炎 ・黴風	

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果					
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他 剤との併用により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	使用量に上 限があるもの			
抗 白 癬 菌 成 分	塩酸ネチコ ナゾール ・アトラント 軟膏1% ・アトラント 外用液1%	抗真菌作用 ・塩酸ネチコ ナゾールは、 皮膚糸状菌 をはじめ酵母 状真菌、黴菌 などに優れた 抗真菌作用 を示した。 主な臨床分 離株に対する 最小発育阻 止濃度(MIC) は次のとおり である。 作用機序 塩酸ネチコ ナゾールの作用 機序は、完全 発育阻止及 び殺菌的作用 を示す高濃 度域では直 接的細胞膜 障害が、また 部分的発育 阻止を示す濃 度域において は真菌細胞 の構成成分 であるエルゴ ステロールの 合成阻害が 主で、その作 用による膜脂 質組成の変 化が前者の 作用を増強す るものと考え られる。					アトラント軟 膏 0.1~5%未満 (局所の刺激 感、皮膚炎、 発赤・紅斑、 そう痒感、湿 潤、落屑の増 加等) 0.1%未満 (亀裂、白癬 疹) 頻度不明 (自家感受性 皮膚炎) アトラント外 用液 0.1~5%未満 (局所の刺激 感、皮膚炎、 発赤・紅斑、 そう痒感等) 0.1%未満 (亀裂) ((*軟膏と 比較して刺激 感が多い。))		本剤成分過敏既 往歴、著しい皮膚 面	電裂、糜爛面(ア トラント外用液)		適用部位 ・眼科用として角 膜、結膜には使 用しない。 ・著しい糜爛面 には使用しない。 ・亀裂・糜爛面 には注意して使 用する。		1日1回患部に塗布する。	下記の皮膚真菌 菌症の治療 ・白癬、足白 癬、体部白癬、 股部白癬 ・皮膚カンジダ 症、指間びらん 症、間擦疹 ・黴菌	

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化) につながるおそれ	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの						特異体質・ア レルギー等 によるもの	使用量に上 限があるもの				過量使用・誤使 用のおそれ
抗 白 癬 菌 成 分	塩酸フテナ フィン	メンタックス クリーム・ 液・スプレー	抗真菌作用 ・抗真菌活性 塩酸フテナ フィンは皮膚 糸状菌 (Trichophyto n属、 Microsporium 属、 Epidermophyt on属)及び黴 風菌 (Malassezia furfur)に対し て強い抗菌力 を示し、その 作用は殺菌 的である。 作用機序 塩酸フテナ フィンの作用 機序は、真菌 細胞膜の構 成成分である エルゴステ ロールの合成 阻害である が、その作用 部位はイミダ ゾール系薬剤 と異なりスク ワレンのエポ キシ化反応 阻害に基づい ている。				0.1~5%未 満 (局所の発 赤・紅斑、そ う痒、接触皮 膚炎、刺激 感、水泡) 0.1%未満 (糜爛、落 屑、亀裂) クリーム剤 安全性評価 対象例9,517 例中、131例 (1.38%)206 件 主な副作用: 局所の発赤・ 紅斑54件 (0.57%)、接 触皮膚炎39 件(0.41%)、 そう痒39件 (0.41%)、刺 激感22件 (0.23%)等 液剤 安全性評価 対象例1,922 例中、16例 (0.83%)23 件 主な副作用: 局所の発赤・ 紅斑7件 (0.36%)、そ う痒6件 (0.31%)、刺 激感4件 (0.21%)等		本剤の成分過敏 症既往歴、著しい 糜爛面	・妊婦又は妊娠の 可能性のある婦人 ・低出生体重児又 は新生児 ・乳児又は3歳以下 の幼児 ・亀裂、糜爛面には 注意して使用する。 (液・スプレー剤)				投与部位 ・眼科用として角 膜、結膜に使用 しないこと。 ・著しい糜爛面 には使用しないこ と。 ・亀裂、糜爛面 には注意して使用 すること。(液・ス プレー剤) ・点鼻用として鼻 腔内に使用しな いこと。(スプ レー剤のみ) ・顔面、頭部等、 吸入する可能性 のある患部には 注意して使用す ること。(スプレー 剤のみ)		液・クリーム 1日1回患部に塗布する。 スプレー 1日1回患部に噴霧する。	下記の皮膚真 菌症の治療 ・白癬:足部白 癬、股部白癬、 体部白癬 ・黴風	
ク ロ ト リ マ ゾ ール	タオンゲル クリーム・液	タオンは Candida属、 Trichophyton 属、 Microsporium 属等に対し強 い抗菌作用を 示す。				0.1~5%未 満 (局所の刺激 感、皮膚炎、 熱感、発赤・ 紅斑) 0.1%未満 (糜爛、丘疹)		本剤の成分過敏 症既往歴、著しい 糜爛面(ハクセリン より)	妊婦又は妊娠の可 能性のある婦人				使用部位 眼科用として角 膜、結膜には使 用しない。 著しい糜爛面 には使用しない。 (ハクセリンより)		1日2~3回患部に塗布す る。	下記の皮膚真 菌症の治療 ・白癬:足部白 癬、趾間白 癬、趾間白 癬、頭癬、斑 状小水疱性白 癬 ・カンジダ症: 指間糜爛症、 間擦疹、乳児 寄生菌性紅 斑、皮膚カン ジダ症、爪囲炎、 黴癬		

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化
				併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
抗白癬菌成分	シクロピロクスオラミン	ノトラフェンクリーム ノトラフェン液	抗菌作用 ・シクロピロクス オラミンは皮膚糸状菌及び酵母類に広く抗真菌作用を示し、その作用は殺菌的である。 ・多くのグラム陽性、陰性の細菌類にも抗菌作用を示す。 作用機序 真菌細胞の膜及び膜系に作用して、細胞の増殖・生存に必要な物質の輸送機能を阻害し真菌を死に至らしめるものと考えられている。MICレベルでは、外部基質(電解質、各種栄養分)の細胞内への取り込み及び細胞内高分子物質(タンパク、DNA、RNA)の合成を阻害し、菌の発育を阻止する。高濃度(殺菌濃度)では、更に膜透過性阻害を示し、また、K ⁺ 、アミノ酸等の菌体成分の漏出を亢進させ、菌を死滅させる。					クリーム 0.1~5%未満 (皮膚炎、皮膚刺激作用) ノトラフェン液 ((*クリーム剤と同様の副作用報告))			本剤の成分過敏症既往歴、著しい糜爛面	・妊婦又は妊娠の可能性のある婦人は新生児・乳児寄生菌性紅斑(アルコール性基剤(エタノール等)の局所刺激作用)(ノトラフェン液) ・亀裂・糜爛面(ノトラフェン液)				使用部位 ・眼科用として角膜、結膜には使用しない。 ・著しい糜爛面には使用しない。 ・亀裂・糜爛面には注意して使用する。			1日2~3回患部に塗布又は塗擦する。	・白癬・体部白癬、股部白癬、汗疱状白癬・カンジダ症：間擦疹、乳児寄生菌性紅斑、指間糜爛症

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効果効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	効果効果		
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの			使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
硝酸エコナゾール	ハラベール クリーム・液	抗菌活性 ・本剤の抗菌スペクトルは広く、皮膚糸状菌、Candida albicans、その他のCandida属菌種、Candida以外の酵母及び酵母様真菌、黒色糸状菌、Aspergillus属菌種、Penicillium属菌種、放線菌、グラム陽性細菌に対して強い抗菌活性を示す(in vitro)。 作用機序 本剤の作用機序は、細胞膜に一次作用点を有し、物質輸送と透過性障壁を阻害し、高分子物質合成阻害と呼吸阻害を二次的に誘起させ、更に高濃度ではRNA分解を促進し、細胞発育阻止又は細胞死に至らしめる					本剤に過敏な患者 ・乳児寄生菌性紅斑(アルコール性基剤が局所刺激作用)(液のみ) ・妊婦又は妊娠の可能性のある婦人				眼科用として角膜、結膜には使用しない。 ・本剤の基剤の油脂性成分は、コンドーム等の避妊用ラテックスゴム製品の品質を劣化・破壊する可能性があるため、接触を避けさせる(クリームのみ)		通常の1日2～3回患部に塗布する。	下記の皮膚真菌症の治療 白癬：足部白癬(汗疱状白癬)、手部白癬(汗疱状白癬)、体部白癬(斑状小水疱性白癬、頑癬)、股部白癬(頑癬) カンジダ症：指間びらん症、間擦疹、乳児寄生菌性紅斑、爪囲炎、外陰炎(ただし、外陰炎はクリームのみ適用) 蕁風

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果						
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの										
抗 白 癬 菌 成 分	硝酸オキシコ ナゾール	オキナゾール クリーム・ 液	抗菌作用(in vitro) 硝酸オキシコ ナゾールは皮 膚糸状菌、酵 母状真菌、二 形性真菌(徳 床分離株)等 に対して広範 固な抗菌スペ クトルを有し、 そのMICは10 μg/mL以下 であった。また、好気性、 通性嫌気性 のグラム陽性 球菌及び桿 菌に対しても 抗菌活性を示すことが認められた。 作用機序 硝酸オキシコ ナゾールの抗 真菌活性は、 直接的細胞 膜障害作用 により発揮さ れる。また、 低濃度域で の部分的発 育阻止効果 には、エルゴ ステロール合 成阻害作用 が関与してい る。			0.1~5%未 満 (局所の発 赤、刺激感、 接触皮膚炎、 そう痒) 0.1%未満 (局所の腫 脹) クリーム剤 総症例数 11,737例中 117例 (1.00%)、196 件 主な副作用 発赤61件 (0.52%)、刺 激感46件 (0.39%)、そ う痒の増強 40件 (0.34%)、接 触皮膚炎40 件(0.34%) 等 液剤 総症例数 2,226例中46 例(2.07%) 70件 副作用の内 訳:刺激感32 件(1.44%)、 発赤19件 (0.85%)、接 触皮膚炎11 件(0.49%)、 そう痒の増強 8件(0.36%)			本剤の成分過敏 症既往歴、著しい 糜爛面	・乳児寄生菌性紅 斑(アルコール性基 剤が局所刺激作 用。液のみ) ・亀裂、ひらん面 (刺激を生じること がある。液剤)		使用部位 ・眼科用として角 膜、結膜に使用 しないこと。 ・著しいひらん面 には使用しない こと。 ・液剤は、刺激を 生じることがある ので、亀裂、ひら ん面には注意し て使用すること。 使用時 ・クリーム剤の基 剤の油性成分は、 コンドーム等の 避妊用ラテック クスゴムの品質を 劣化・破壊する可 能性があるため、 接触を避けさせる こと。	1日2~3回患部に塗布す る。	下記の皮膚真菌 菌症の治療 白癬:足白癬、 手白癬、股部 白癬、体部白 癬 カンジダ症:間 擦疹、乳児寄 生菌性紅斑、 指間ひらん 症、爪囲炎、そ の他の皮膚カ ンジダ症 皰風			

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化		用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化				
			併用禁忌(他 剤との併用] により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ				
抗 白 癬 菌 成 分	硝酸ミコ ナ ゾール	・アムリード D軟膏 ・フロリードD クリーム ・フロリードD 液	抗菌作用(in vitro)→フロ リードD(ク リーム)より ・真菌に対す る作用 硝酸ミコ ナゾールは白癬 の起因菌であ る白癬菌属、 小胞子菌属、 表皮菌属やカ ンジダ症の起 因菌であるカ ンジダ属をは じめ、アスペ ルギルス属、 クリプトコク ス・ネオフォ ルマンス等の 諸菌種に対し ても強い抗真 菌作用を有す る。 作用機序 硝酸ミコ ナゾールの抗菌 作用、生化学 的作用及び 超微形態学 的作用を検討 した結果、 硝酸ミコ ナゾールは低濃 度では主として膜系(細胞 膜並びに細胞 壁)に作用 して、細胞の 膜透過性を 変化させるこ とにより抗菌 作用を示す。 また、高濃度 では細胞の 壊死性変化 をもたらし、殺 菌的に作用 する。				頻度不明 (発赤・紅斑、 そう痒感、接 触性皮膚炎、 びらん、刺激 感、小水疱、 乾燥・亀裂、 丘疹、落屑、 腫脹等) フロリードDク リーム 総症例 28,803例中 231例 (0.80%) 主として、発 赤・紅斑 (0.35%)、そ う痒感 (0.21%)、接 触性皮膚炎 (0.13%)、び らん (0.08%)、刺 激感 (0.07%)、小 水疱 (0.07%)等 の皮膚炎症 状であった。 0.1~5%未 満 (発赤・紅斑、 そう痒感、接 触性皮膚炎) 0.1%未満 (びらん、刺 激感、小水 疱、乾燥・亀 裂、丘疹、落 屑、腫脹等) フロリード液 総症例2,587 例中34例 (1.3%) 主として、そ う痒感 (0.4%)、発 赤・紅斑 (0.3%)、刺 激感 (0.2%)、落 屑(0.2%)、 乾燥・亀裂 (0.2%)、疼 痛(0.2%)等 の皮膚炎症 状であった。 0.1~5%未 満 (そう痒感、 発赤・紅斑、 刺激感、落 屑、乾燥・亀 裂、疼痛、小 水疱等)			本剤の成分過敏 症既往歴	・妊婦(3カ月以内) 又は妊娠の可能性 のある婦人 ・乳児寄生菌性紅 斑(アルコール性基 剤(エタノール等) の局所刺激作用。 フロリードD液)			使用部位 眼科用として、角 膜、結膜には使 用しない。 その他 本剤の基剤であ る油脂性成分 は、コンドーム等 の避妊用ラテッ クスゴム製品の 品質を劣化・破 損する可能性が あるため、接触を 避けさせる。					1日2~3回患部に塗布す る	下記の皮膚真 菌症の治療 白癬:体部白 癬(斑状小水 疱性白癬、頑 癬)、股部白癬 (頑癬)、足部 白癬(汗疱状 白癬) カンジダ症:指 間びらん症、 間擦疹、乳児 寄生菌性紅 斑、爪囲炎、外 陰カンジダ症、 皮膚カンジダ 症 癬風

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
抗白菌菌成分	医療用医薬品としてなし																
トルナフター	ハイアラジン軟膏・液	各種真菌類に対するトルナフターの特異的な抗菌力 対象菌 MIC (µg/mL) Trichophyton rubrum 0.0125 T. interdigitale 0.025 T. asteroides 0.025 Microsporumypseum 0.0125 Microsporum japonicum 0.005 Epidermophyton inguinale 0.005 Candida albicans > 500 Cryptococcus neoformans > 500 Aspergillus fumigatus > 500 Aspergillus niger 0.0125				0.1%未満(局所刺激、発赤、皮膚炎等)	頻度不明(過敏症状)		本剤成分過敏症既往歴	・広範囲の病巣に使用する場合	・患部が化膿しているなど湿潤、びらんがある場合はあらかじめ適切な処置を行った後使用する。 ・長期間使用しても症状の改善が認められない場合は改めて診断し適切な治療を行うことが望ましい。		・眼科用に使用しない。			通常、1日2~3回、適量を患部に塗布又は塗擦する。	汗疱状白癬、頑癬、小水疱性斑状白癬、皰風